

自分の思いや意図を音で表現することができる力の育成

～ 聴く活動から感受し、表現する授業をとおして ～

小林 美佳

1. テーマ設定の理由

現行の学習指導要領では、言語活動の充実が求められている。音楽科では、聴いたり歌ったりする活動よりも、話し合ったりワークシートに記入したりする時間が増え、音のない音楽の授業が展開されることが多くなった。確かに言語活動は重要であるが、音楽活動において音のない授業、音で表現しない授業はのぞましいとは言えない。生徒は曲を聴き、歌い、創作し楽器を演奏することで表現活動を行っている。言葉で表現する活動はその一助にすぎず、表現活動における補足的な役割だと考える。歌唱表現の工夫を発表し、「今回の工夫点はこの部分です」と伝えたり、お互いの演奏を聴いて「ここがよかった、もっとこうしたらよい」と評価したりすることは重要な言語活動である。

しかし、音楽科で求められているのは自分のもつ思いや意図を、「音楽をつかって」表現することができる力である。そこで本研究では、生徒がもつ思いや意図を、音で表現することのできる力を育成していきたいと考えている。それは歌唱であったり、器楽であったりさまざまな形態が考えられるが、自分自身の力で表現できるようになって、初めて心から音楽を楽しめるようになると思う。そして、生涯に渡って音楽に親しんでいく生徒を育てていきたい。

2. 思いや意図を表現すること

音楽科における思いや意図とは、学習活動を進めていく中で生まれる「こんな作品をつくりたい」「こんなふうに表現したい」「感じ取ったことを伝えたい」などといった考えである。主に音楽表現の創意工夫の観点で評価され、思考・判断に大きく関わっている。

音楽活動を行う中で、思いや意図をもつことは必要不可欠である。授業に関わらず、普段生徒が接しているさまざまな音楽活動でも、思いや意図がなければ表現することはできない。吹奏楽で楽器を吹くときに「この旋律をやわらかく演奏したい」と考えること、合唱で「ソプラノが一番大きく聞こえるようにバランスを考えて歌いたい」と考えることなどである。しかし、思いや意図をもつためには生徒が「やってみよう」「自分にもできそうだ」と思えるような題材設定が必要である。ただ与えられて、やらされる課題には思いや意図は生まれにくい。適切な題材を提示し、生徒が自ら進んで挑戦しようとし、それを表現したいと思えて初めて、音楽活動が展開される。本研究では、生徒がもつ思いや意図を、生徒自身の力で表現できる力を育成することを目的として、授業を展開していく。

3. 「聴く活動」の重要性

さて、思いや意図を表現する力の育成に必要なことは何であろうか。本研究では、さまざまな場面での聴取活動、つまり「聴く活動」を重要視していきたい。「聴く活動」というと、まず思い浮かべるのが鑑賞領域での活動である。生徒は中学校の3年間で多くの作曲家の作品を鑑賞し、仕組みを学び、感じ取ったことを言葉で表現する。単に「きれいだった」と表現するのではなく、「ヴァイオリンの響きが豊かに聴こえてきれいだった」「強弱の表現がはっきりしていて迫力があつた」など具体的な音楽の要素をもとにして、自分の考えを表現することが望まれる。

鑑賞活動に限らず、音楽の授業では「聴く活動」を行う場面が生徒の思考を促し、音楽表現の工夫につながるが多々見られる。例えば歌唱では、表現の工夫を考えるために、生徒は強弱や速度などの要素をもとにして試行錯誤する。そこに、生徒が思いもよらないような聴取教材を聴かせることで、「こんな表現もあるのか」と新たな発見をし、さらによりよい表現をもとめて工夫するようになる。創作では、身近な楽曲を聴いたり、ほかの生徒の作品を聴いたりすることで、自分にもできるかもしれないと思えたり、自分の作品を見直したりすることができる。「聴く活動」を効果的に仕組むことで、生徒の思いや意図は深まり、音楽活動はさらに充実すると考えられる。

また、それを表現するための力も「聴く活動」をとおして育成できると考える。さまざまな表現方法を聴くことで、表現の幅が広がるからである。お互いの演奏を聴き合うことも重要で、視覚的にも表現する

ことの多様性を知ることができる。生徒が多く表現方法を学び、それを自分の力で試し、実際に自分の思いや意図を表現することを目指していきたい。しかし、聴くだけで表現の技能が高まるわけではない。技術面の指導はこれまで同様教師が主導し、全体に指導していくことも忘れてはならない。

4. 全体研究との関わり

今年度からの全体研究では、生徒が「深く考える」ことのできる授業づくりを行う。音楽科の授業の中で、生徒が「深く考えている」と言える場面は多い。例えば、歌唱教材において「どのような表現をすれば、よりよい歌になるだろうか」、鑑賞教材において「作曲者はどんな意図をもってこの曲をつくったのだろうか」などと考えるときである。

音楽活動では、まず聴いたり歌ったりして「感受する」こと、そしてそれをもとに自分の思いや意図をもって「表現する」ことが重要となる。生徒は自分自身と向き合い考えることや、仲間との活動をとおしで考えることで、多くの経験を積む。それによって生徒一人一人の世界は大きく広がっていく。こんな考え方もあるのか、こんなふうを感じる人もいるのか、という素直な驚きや発見が、感性を豊かにし、音楽活動の可能性を無限に広げていくことができる。ただし、広げるだけでは音楽を表現する力がついたとは言えない。何でも好きに表現すればよいのではなく、「この曲にふさわしい表現とは何か」「もっとよい工夫はないだろうか」とさらに考えることが「深く考える」ことだと言える。つまり、「深く考える」ことによって、「思考が広がる」場合と「思考がまとまる」場合があると考えられる。どちらも音楽活動を行う上では欠かせないことである。また、ただ心で考えているだけでは、音楽表現はできない。それをいかに伝えていくかが表現することの難しさでもあり、楽しさでもある。そのため、教師は生徒が「やってみたい」「自分にもできそうだ」と思えるような教材を用意し、「楽しい」「できた」という経験を多く積ませることが必要となる。

5. これまでの研究のあゆみ

昨年度まで音楽科は、『音楽的な感受を基盤とした思考・判断・表現する力を育む～音楽を形づくっている要素をもとに、表現領域と鑑賞領域との関連を図った題材構成をとおして～』という主題のもと研究を行ってきた。

全体研究を受け、生徒が思いや意図をもって音楽表現を工夫したり、音楽を味わって聴いたりすることができる力を身に付けさせたいと考え実践を行った。これらの力を身に付けるためには、「どんな表現方法があるのだろうか」「この曲にはどんな工夫がされているのだろうか」などといった問いをもたせることが必要となる。そこで、生徒に感受させるもととなる聴取教材にこだわって、教材の工夫を行った。聴取教材は、比較的平易で親しみやすい旋律であること、多くのバリエーションがあることなどを条件とし、その時の題材にもっとも合うと思われるものを選曲した。

例えば、歌詞の内容から歌唱表現を工夫する授業では、生徒の予想に反するような表現の工夫をしている楽曲を選ぶことで、「どうしてこのような表現をしたのだろう」「この表現をすることでどんな効果があるのだろう」といった問いをもたせることにつながった。また、オブリガートの創作の授業では、もとの旋律にハーモニーをつけたもの、オブリガートをつけたものと変化していく楽曲を聴かせ、工夫を加えることで曲の雰囲気が大きく変わることを感じ取らせることができた。聴取教材の効果的な利用は、生徒が問いをもつきっかけとなり、その後の音楽活動に大きく影響することが実証できた。「どんな工夫がされているのか」を考えることで自分の作品を見直すことができ、聴取教材の工夫を真似したり、それを利用してさらに工夫を考えたりする姿が見られた。適切な教材によってきっかけをあたえることで、生徒の「やってみたい」「こんな作品にしたい」という意欲を向上させることにつながると考えられる。

また、効果的な聴取と同様に重要となるのが、教師の役割である。音楽科では、グループでの活動を取り入れることが多い。個人で考えたことを仲間と共有し、さらに高めていく過程が、音楽活動を深めるうえで効果的と考えられるからである。しかし、グループ活動を進めていくにあたり、教師がそれぞれのグループを巡回していると時間がかかりすぎ、生徒の活動が停滞してしまうという問題点もある。そこで、教師が適切な声かけを適切な時間に行うことが必要となる。巡回した中から授業のねらいに則した工夫を行っている生徒を取り出し、全体に経過を見せることで仲間の考えた工夫を知り、「自分はこうしたい」という意欲を高めていく。教師の声かけが生徒どうしの相互作用を促し、よりよい音楽活動を展開するきっかけとなると考えられる。

表現領域と鑑賞領域の関連を図ることは、生徒が音楽的な感受をもとに、思考・判断・表現する力を育てるうえで効果的な手だてだと言える。しかし、生徒が聴取教材から感受したことや、表現するために工夫したこと等を見とることについては、課題が残った。ワークシートの工夫や録音機器の利用など、生徒の見とりに関する手立てを今後も考えていきたい。

6. 今年度の具体的な研究内容

今年度は、生徒が「深く考える」ことのできる題材設定と、活動方法の研究を中心に行うこととする。前述したとおり、音楽の可能性を広げるには生徒が感じる楽しさ、驚きといった要素が欠かせない。そこから、その驚きをつくり出しているもとは何だろう、と考えることにつながる。例えば、「音楽を形づくっている要素」がもとになっている場合、「どの要素がその驚きにつながったのか」と考えることで「強弱の工夫だ」と気づき、自らの音楽表現に生かすことができるようになる。ただ感じただけで終わるのでは「深く考える」ことにつながらない。適切な題材を与えることによって、ひとつの発見から、生徒のなかで次々に新しい考えが生まれ、自分なりの思いや意図をもつようになる。思いや意図をもつようになると、「やってみたい」「伝えてみたい」という思いも強くなる。そして、それを表現するための方法をさらに考えるようになる。つまり、生徒の意欲を高めるような題材設定が、「深く考える」ことの第一歩になると考える。

それでは、どのような活動を仕組みば、生徒は意欲的に題材に取り組めるようになるだろうか。これまでも効果的な方法として行われてきたのがグループ活動である。例えば、合唱が好きな生徒が多いのはなぜか。ひとつの理由として「みんなで歌う」ことの楽しさが味わえるからではないだろうか。自分の好きなように「ひとりで歌う」ことはカラオケでもできる。だが、パートで声を合わせ、どのように歌うべきかを考え、実際に表現していく過程は、音楽科でしか味わえない貴重な体験である。また、創作活動においても個人でつくった作品を、仲間と一緒に演奏してみる、聴きあうなど、音楽科の授業では必ず他者との交流が行われる。自分だけでは気づかなかった表現に気づいて思考が広がったり、逆に周りの意見を聞いて表現方法をまとめていったりすることで、よりよい音楽活動が展開される。意図的にグループ活動を仕組み、生徒が「深く考える」機会を与えることが必要ではないだろうか。これまでも、グループ活動は授業の重要な要素として取り入れてきた。今回の全体研究を受け、音楽科ではさらに細かな部分の工夫を考えていきたい。

具体的には、

- ①グループ構成
- ②グループ活動にかける時間
- ③活動への支援

の3点について研究していきたい。

①については、人数や男女別・パート別など、どのようなグループを構成すれば音楽活動が意欲的に進められるのかについて考えていく。これは題材の目的によって変わってくるが、教室の広さや使用する機器の数など物理的な問題もある。さまざまな形態を実践し、よりよいグループ構成を考えていきたい。

昨年度までの研究でも課題となったのが②である。前述したように、グループ活動を仕組みと授業のほとんどがそれに費やされる。グループの数が増えれば、さらに時間もかかる。どこまでを個人で取り組み、どこまでをグループで活動させるのかを明確にしなければならない。これは③の視点にも関わってくる。教師がどのような支援を行うかで、活動内容が大きく変わるからである。なかなか意見が出ずに進まないグループ、逆に考えがまとまらず広がりすぎてしまったグループなど、多くの場面で教師の支援が必要となる。他のグループに発表させることで全体になげかけたり、一緒に表現活動をすることでよりよいものを考えさせたり、どのグループにも適切な支援を行いたい。ひとつのグループだけに時間をかければ、授業はすぐに終わってしまう。限られた時間内でできる支援は何か、どのような工夫をすればよいかを模索したい。また、使用する機器の種類や、効果的な使用方法も合わせて考えていきたい。

歌唱・鑑賞・創作・器楽のそれぞれの分野でさまざまな方法を試し、生徒が「深く考える」ことのできる授業を提案していきたい。

7. 授業実践（事前研究会・中等教育研究会）

第1回事前研究会 7/4 3年生・創作

第3学年音楽科学習指導案

1. 指導内容 A 表現 (3) ア、〔共通事項〕(1) ア (旋律・リズム)

2. 題材名 5つの音をつかって、言葉にあった旋律をつくろう

3. 題材設定の理由

本題材では、創作と歌唱を関連づけた活動を展開していく。3年生は、昨年度の表現活動において、主旋律とともに自分たちで創作したオブリガートを実際に歌唱し、ハーモニーの美しさや旋律の重なりのおもしろさを感じるという活動を経験した。これらの経験から、自ら表現しようとしたことが音楽になることの喜びや、仲間と共有しあうことの楽しさを感じることができた。

これまでは、与えられた動機の続きを考えたり、もともとある旋律にオブリガートをつけたりという創作活動を行ってきたが、今回は初めて、自分自身で一から旋律をつくっていく活動を行う。何もないところから始めるには経験が足りないため、今回は5つの音のみで旋律づくりを進める。生徒の中には創作活動は難しいという意識が根強くある。そこで、1年生時に経験した「言葉にリズムをつける」活動を生かし、「山梨大学附属中学校」という慣れ親しんだ単語に旋律をつけることで、自分でもできそうだ、という思いをもたせていきたい。

5音をピアノの黒鍵のみに限定したのは、これまでの創作活動で、ピアノが弾けずに苦勞する生徒が多く見られたからである。キーボードを前にしても、どこに「ド」の音があるかわからない生徒も多い。グループで協力して歌唱して確認するため、仲間のサポートは受けることができるが、やはり自分ですぐに音が出せることが重要である。また、昨年度の活動の中で、自分の作品を弾いてもらう間、仲間の活動を止めてしまうことに抵抗を感じる、という感想が生徒から寄せられた。黒鍵のみに限定することで、位置も確認しやすくなり、意欲的に活動できるのではないかと考えた。音高には制限は設けませんが、自分で歌唱できる旋律、という条件をつけることで無理な跳躍がある旋律ができないよう配慮する。

今回の題材をとおして、創作活動に対する苦手感を減らし、仲間と協力しながらひとつの作品を創り上げる楽しさを感じさせたい。また、自分だけの作品ができることの喜びを感じ、ほかの合唱曲や鑑賞曲に取り組みむときに、作者の思いや意図を感じ、自分なりに表現したいと思える生徒を育成していきたい。

4. 全体研究との関わりについて

今年度からの全体研究では、生徒が「深く考える」ことのできる授業づくりを行う。

今回の題材では、苦手意識の強い創作活動を取り上げた。五音音階という新たな知識によって、生徒の活動意欲を刺激し、「たった5つの音だけで、これだけたくさん曲ができるのか」という新鮮な驚きを与えたい。五音音階にもさまざまな種類があるが、今回はピアノの黒鍵のみを使用する。CM曲などの短いフレーズでも、印象に残る旋律があることを知り、「どうやってつくられているのだろう」「自分にもできるのではないか」という意欲をもたせていく。5つの音をどう組み合わせるのか、実際に歌唱しながら工夫していくことで、生徒の思考が深まっていくと考える。ただし、何もないところから旋律をつくることは生徒の実態として難しいため、短い言葉に旋律をつけるという活動にすることで、これまでの経験を生かして創作活動を行えると考えた。さらに、「もし、自分のつくった旋律がCMで流れるとしたら」という場面設定をし、自分がつくった旋律を第三者に聴かせることを前提に創作を行う。そのため、「このような印象を伝えたい」「聴いた人をこのような気持ちにさせたい」などという思いや意図をもつことが必要になる。自分が意図したことと、聴いた人が受ける印象の違いにも注目させ、よりよい旋律づくりについて考えさせていきたい。

また、今年度はグループ活動についての研究を中心に行っていく。今回の授業では男女別4～5名のグループを編成した。これは、お互いの作品を歌いあうときに、同声どうしのほうが合わせやすく、活動が進みやすいと考えたからである。各グループにはキーボードとiPadをそれぞれ一台ずつ用意し、音取りや旋律の確認に使用させる。相互に作品づくりを見合うことで、教師の巡回がないときでも活動が滞らないよう指導していく。教師は巡回する中で、ねらいに則した活動を行っている生徒を全体に紹介し、さらに個々の意欲を高める工夫を行う。できる限り多くの仲間の作品に触れ、自分の作品を見直すきっかけを

与えたり、「もっとよくしたい」という意欲をもたせたりすることにつなげていきたい。今回は機材の数などの問題でこのようなグループ構成となったが、人数や機材の数についても適当であったか検証していきたい。

5. 教材について

(1) 教材

- 〈聴取教材〉 五音で構成されている曲 (CM 曲等)
 「上を向いて歩こう」
 「アメージング グレイス」
 「山梨大学教育人間科学部附属中学校校歌」

(2) 教材選択の理由

今回の題材では、まず5つの音だけでもさまざまな旋律がつけられることを、生徒に示すことが必要となる。そこで、生徒がよく知っている楽曲の中で、5つの音で構成されているものを選択した。テレビCMでよく耳にした旋律を例として挙げることで、5つの音だけでも音楽が無限の広がりをもつことを感じ取らせたい。身近な場所にあふれる音楽が、実は5つの音で作られていることや、それらの旋律が印象に残りやすく、親しみやすいものであることにも気づかせていきたい。

6. 題材の目標

- ・五音音階について理解し、自分の思いや意図をもって創作することができる。
- ・歌唱しながらよりよい旋律づくりをすることができる。
- ・お互いの演奏を聴き、批評するなどして言葉にふさわしい旋律をつくることができる。

7. 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
① 五音音階の楽曲に関心を持ち、意欲的に創作、表現活動に取り組もうとしている。 【観察、ワークシート】 ② グループのメンバーの意見を聞いたり、自分の意見を述べたりし、創作活動に意欲的である。【観察】	① 五音音階の特徴について理解し、5つの音でどのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察、ワークシート】	① 五音音階の特徴を理解し、自分の作品を歌唱しながらよりよい旋律をつくる技能を身に付けている。 【観察、ワークシート】

8. 指導計画と評価計画について

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
五音音階について理解し、言葉に合わせて旋律づくりをする	1時間目	・五音音階について知る。 ・キーボードやiPadを使って、実際に5音でできている曲を試す。	関①五音音階の楽曲に関心を持ち、意欲的に創作、表現活動に取り組もうとしている。 【観察、ワークシート】		・学習形態一斉

		<ul style="list-style-type: none"> ・「山梨大学附属中学校」という言葉に4分の4拍子でリズムをつけ、どのような印象の旋律にしたいのかをワークシートに記入する。 ・リズム譜を書く。 ・グループのメンバーにできたリズムを聴かせ、どんな印象をもったのか確認する。 	<p>創①五音音階の特徴について理解し、5つの音でどのように旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察、ワークシート】</p>	<p>☆五音音階について理解し、自分の思いや意図をもって旋律づくりを行っている。</p> <p>■創作できない生徒には、キーボードで5つの音を確認し、言葉に合うリズムをつくり、それに音を当てはめさせていく。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人 ・学習形態 グループ
旋律をつけ、グループで歌唱しながらよりよい旋律に仕上げる	2時間目 (本時)	<ul style="list-style-type: none"> ・前時に創作したリズムに、5つの音で旋律をつけていく。 ・グループで歌いあいながら、歌いやすさなどを考え、よりよい旋律に仕上げていく。 	<p>技①五音音階の特徴を理解し、自分の作品を歌唱しながらよりよい旋律をつくる技能を身に付けている。 【観察、ワークシート】</p>	<p>☆グループのメンバーと歌唱することで、自らの意図したオブリガートになっているかを確認し、旋律の仕上げをしている。</p> <p>■仕上げができない生徒には、グループのメンバーに歌唱してもらい、それを聴くことで自らの意図したオブリガートになったかを確認させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人 ・学習形態 グループ
創作した旋律を歌唱し、お互いに発表しあう	3時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の創作した旋律を歌唱する。 ・グループで発表しあい、お互いの作品について感想を伝え合う。 ・自分が意図したことが、相手にも伝わったか確認する。 ・各グループからひとつずつ作品を出し合い、全体で発表する。 ・発表を受けて感じたことや、創作の感想をワークシートに記入する。 	<p>関②グループのメンバーの意見を聞いたり、自分の意見を述べたりし、創作活動に意欲的である。 【観察】</p>	<p>☆お互いの作品を歌いながら、感想を述べたり、よりよい表現について意見を述べたりしている。</p> <p>■活動ができない生徒には、グループのメンバーと一緒に歌唱させ、自分の作品と比べさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 グループ ・学習形態 一斉

第3学年音楽科学習指導案

1. 指導内容 A 表現 (3) ア、〔共通事項〕(1) ア (旋律・リズム)
2. 題材名 歌詞に合わせて旋律をつくろう！
3. 題材設定の理由

本題材では、創作と歌唱を関連づけた活動を展開していく。3年生は、昨年度の表現活動において、主旋律とともに自分たちで創作したオブリガートを実際に歌唱し、ハーモニーの美しさや旋律の重なりのおもしろさを感じるという活動を経験した。また、今年度はピアノの黒鍵のみをつかかって言葉に合った旋律をつくるという活動を行った。これらの経験から、自ら表現しようとしたことが音楽になることの喜びや、仲間と共有しあうことの楽しさを感じることができた。

今回は、創作活動の集大成として、自分たちのオリジナルソングづくりに挑戦する。5音を使っての創作では、まず言葉にリズムをつけ、そこに音を乗せていった。また、オブリガートづくりでは和音の構成音から簡単な旋律をつくり、それをもとに工夫していった。これまでに学んだ知識や経験を活かし、自分が最もつくりやすい方法を選ばせて創作していく。ただし、ある程度の制限を設けることは必要であるため、ハ長調の曲に統一する。曲の長さについては、4分の4拍子・16小節を基本とし、表現したい思いや意図によっては4分の2拍子・16小節も可とする。

また、前回の創作活動では、記譜を行うことが創作の時間を減らし、苦手意識を高める結果となったため、今回は全体としての記譜の活動は仕組まない。ただし、譜面におこすことを得意とし、そのほうが創作しやすいという生徒には、適宜記譜もさせる。生徒にはまず自分の作品を歌うことを重視させ、録音機器を用いて自分の作品を客観的に聴く活動を行う。最終的に完成した作品は、教師が譜面におこし、全体に共有する。苦手な記譜に時間を割くよりも、よりよい旋律づくりのために試行錯誤する時間の確保を最優先する。生徒個人の能力に合った形で活動できるように、教師が準備をしておくことが大切である。

今回の題材をとおして、これまでの創作活動を総括し、仲間と協力しながらひとつの作品を創り上げる楽しさを感じさせたい。また、自分だけの作品ができることの喜びを感じ、ほかの合唱曲や鑑賞曲に取り組むときに、作者の思いや意図を感じ、自分なりに表現したいと思える生徒を育成していきたい。また、完成した作品を大切に、お互いの作品を批評し合うなかで、そのよさを味わい、これからの音楽活動にも意欲的に取り組ませていきたい。

4. 全体研究との関わりについて

今年度からの全体研究では、生徒が「深く考える」ことのできる授業づくりを行っている。

これを受けて音楽科では、今回「自分たちでひとつの曲をつくりあげる」活動を行う。これまでに行った創作活動で、生徒たちは、試行錯誤して自分たちだけの旋律をつくることの楽しさや難しさを経験してきた。3年間の集大成として全員でひとつの曲をつくりあげ、それを自分たちで歌うことの喜びを感じさせていく。

・「自分自身を俯瞰する」こと

「深く考える」ための要素として挙げられている「自分自身を俯瞰すること」については、音楽科では主に発表の場面として設定している。作品が途中であっても、お互いに発表し聴きあうことで、改善すべき点もよい点も気づくことができる。音楽科では生徒が自ら知覚・感受し、それを表現活動につなげることが求められている。自分だけでなくほかの生徒の様子も知ることで、知覚・感受したことを、自分自身の活動に活かしていくことができる。発表の場面を適切に設けることによって、自分自身を俯瞰し、よりよい作品づくりにつなげていくことができると考えた。

そのための方策として、個人活動の時間とグループ活動の時間を分けて設定した。これまででは創作の初期段階からグループで活動させることが多かったが、今回は2人に1台のiPadを使用させ、個人でじっくりと創作する時間を設けた。「GarageBand」を使用し、リズム・旋律・歌声を録音させることで、自分のつくった作品をすぐに確認することができる。また、編集作業も比較的簡単にできるため、グループで試行錯誤したときにも、部分的に録音のやり直しもできる。ただし、iPadの使用には難点もある。一つ一つの音量が小さく聴き取りにくいことや、アプリがうまく作動しないことなどが考えられる。今回は、これらの点も踏まえて、授業におけるICT機器の利用についても考えていく。

生徒がお互いの作品を歌ったり聴いたりするときは、男女混合 8 人のグループで活動する。そのグループ内を男女 4 人ずつに分け、それぞれ 8 小節ずつ作曲していく。グループでの活動が進めやすいよう、メンバーは教師が指定し、お互いに助け合えるようにする。

5. 題材の目標

- ・これまでの創作活動で得た知識や経験を生かし、自分の思いや意図をもって創作することができる。
- ・歌唱しながら、歌詞にあったよりよい旋律づくりをすることができる。
- ・お互いの演奏を聴き、批評するなどしてよりよい旋律をつくることができる。

6. 題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能
③ 創作活動に関心をもち、意欲的に創作、表現活動に取り組みようとしている。 【観察、ワークシート】 ④ グループのメンバーの意見を聞いたり、自分の意見を述べたりし、創作活動に意欲的である。 【観察、録音】	② これまでの創作の知識を生かし、歌詞に合わせてどのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察、録音、ワークシート】	② 創意工夫を生かし、自分の作品を歌唱しながらよりよい旋律をつくる技能を身に付けている。 【観察、録音、ワークシート】

7. 指導計画と評価計画について

ねらい	時	学習活動	評価規準	☆Aと判断する生徒の状況例 ■個別な働きかけを要する生徒への支援	備考
創作の手順を知り、言葉に合わせてリズムをつくる	1時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの創作活動のまとめとして、オリジナルソングをつくることを知る。 ・グループをつくり、前半 8 小節と後半 8 小節に分かれ、担当を決めてリズムを創作していく。 	関①創作活動に関心をもち、意欲的に創作、表現活動に取り組もうとしている。 【観察、ワークシート】	☆歌詞を読んで自分のつくりたい曲をイメージし、意欲的にリズムを創作しようとしている。 ■活動できない生徒には、どんな曲にしたいか、具体的にイメージをもたせるようにする。グループのメンバーと協力してリズムを創作するようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 一斉 ・学習形態 グループ
「GarageBand」の使い方を学ぶ あらかじめつくられた歌詞のうち 8 小節分に、個人で旋律をつけていく	2時間目	<ul style="list-style-type: none"> ・2人で1台のiPadを使用する。「GarageBand」の使い方を知り、個人ファイルを作る。 ・前時に創作したリズムに、個人で 8 小節分の旋律をつける。 	創①これまでの創作の知識を生かし、歌詞に合わせてどのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。 【観察、録音、ワークシート】	☆自分で創作の方法を選び、つくりたい曲のイメージをもって創作活動を行っている。 ■創作できない生徒には、これまでの創作を思い出させ、リズムに合わせる方法や和音から音をつなぐ方法を試させる。	<ul style="list-style-type: none"> ・学習形態 個人

<p>引き続き 8 小節を創作し、歌えるよう練習する。</p>	<p>3 時間目</p>	<p>・完成した個人の作品をグループで歌い合う。</p> <p>・つくった旋律を歌い、録音する。</p>	<p>創①これまでの創作の知識を生かし、歌詞に合わせてどのような旋律をつくるかについて思いや意図をもっている。</p> <p>【観察、録音、ワークシート】</p>	<p>☆お互いの作品を歌いながら、感想を述べたり、よりよい表現について意見を述べたり創作したりしている。</p> <p>■活動ができない生徒には、グループのメンバーと一緒に歌唱させ、自分の作品と比べさせる。</p>	<p>・学習形態 グループ</p> <p>・学習形態 一斉</p>
<p>前時に創作した 8 小節をグループで共有し、発表する</p>	<p>4 時間目</p>	<p>・前時に創作した部分をグループに分かれて歌い合う。</p> <p>・お互いの作品を聴き、感想を伝え合う。</p>	<p>関②グループのメンバーの意見を聞いたり、自分の意見を述べたりし、創作活動に意欲的である。【観察】</p>	<p>☆メンバーの作品を歌い合い、聴きあうことで、旋律のつながりやまとまりを考えて創作活動をしている。</p> <p>■活動に参加できない生徒には、組み合わせて歌った印象などを発言させる。</p>	<p>・学習形態 個人</p>
<p>16 小節を合わせ、ひとつの作品をつくる</p> <p>グループで聴きあい、試行錯誤しながらひとつの作品に仕上げていく</p>	<p>5 時間目 (本時)</p>	<p>・前半と後半を組み合わせて、曲全体を歌えるようにする。</p> <p>・16 小節を合わせて歌い合い、旋律の流れを考えてよりよい旋律になるように工夫する。</p> <p>・工夫した旋律をあらためて歌い、録音する。</p>	<p>技①創意工夫を生かし、自分の作品を歌唱しながらよりよい旋律をつくる技能を身に付けている。</p> <p>【観察、録音、ワークシート】</p>	<p>☆自分の思いや意図が伝わるように表現し、よりよい旋律にしようと試行錯誤している。</p> <p>■グループのメンバーと一緒に歌唱させ、どこを改善すべきか考えさせる。</p>	<p>・学習形態 グループ</p>
<p>グループごと仕上がった作品を発表し、作品を完成させる</p>	<p>6 時間目</p>	<p>・完成した作品をグループごとに発表し、評価し合う。</p> <p>・それぞれの作品を全員で歌唱し、オリジナルソングを完成させる。</p>	<p>技①創意工夫を生かし、自分の作品を歌唱しながらよりよい旋律をつくる技能を身に付けている。</p> <p>【観察、録音、ワークシート】</p>	<p>☆グループごとの発表を聴き、よさを感じ取りながら評価している。</p> <p>■評価できない生徒には、基準を確認させ、自分がどう感じたかを考えさせる。</p>	<p>・学習形態 一斉</p>

8. 本時の授業について

- (1) 日時 平成 26 年 10 月 18 日 (土) 10:00~10:50
- (2) 場所 山梨大学教育人間科学部附属中学校 第 1 音楽室
- (3) 本時の目標：お互いのつくった作品を組み合わせ、試行錯誤してよりよい旋律に仕上げる

(4) 展開

過程	学習のねらいと学習活動	教師の指導・支援	評価・備考
導入 (3分)	1. 本時の活動を知る。	・前時までに創作した旋律をグループで共有し、16小節をつなげていくことを伝える。	
展開 (45分)	2. 前半と後半を組み合わせて、曲全体を歌えるようにする。 3. どのようにしたら、ひとつの作品としてよりよく聴こえるようになるかを考え、工夫する。 4. 工夫して完成した作品を歌い、録音する。	・歌詞に合った旋律か、歌いやすいかなど観点を示し、お互いに評価させる。 ・どうしたらよりよい旋律になるのかを、グループで試行錯誤させる。 ・旋律をつなげたときの流れが自然になるよう、意識させる。 ・活動の途中で全体に経過報告をさせたり、よい作品は歌わせて参考にさせたりする。 ・必ずメンバー全員の作品を歌唱して、決定させる。	・学習形態 グループ ・iPadを2人で1台使用する。 ・グループで音を確認するときは、キーボードを使用する。 技①創意工夫を生かし、自分の作品を歌唱しながらよりよい旋律をつくる技能を身に付けている。 【観察、録音、ワークシート】
まとめ (2分)	5. 次回の学習について知る。	・次回は完成させた旋律を歌って、お互いの作品を聴きあうことを伝える。	

資料・「赤学年うた」の歌詞

『赤学年のうた』

一、 やる気にあふれ いつも本気で 自立目指した 響く歌声	二、 ふるさとの空 夢に向かって 個性あふれる はじける笑顔	三、 紅色小俣の 一致団結 つながる想い 春に旅立つ	意志強く 楽しんで 3年間 赤学年 仰ぎ見て 進む道標 仲間たち 赤学年 旗のもと 桐龍祭 時をこえ 赤学年
---	--	--	---



8. 今年度の研究のまとめ

今年度は3年生の創作の授業を中心に授業実践を行った。苦手意識の強い創作分野で、いかに生徒の興味関心をひくことができるかが、授業づくりを行ううえで最も難しい点であった。今年度の3年生は、1年生でリズム創作、2年生でオブリガートの創作を経験している。集大成となる今年度は、まず短い言葉に旋律をつけること（第1回事前研究会）を経験し、最終的には一から曲を創り上げること（中等教育研究会）ができた。

生徒が意欲的に取り組めるよう、今年度の授業ではiPadを使用し、アプリを利用して創作することに挑戦した。中等教育研究会の分科会では、適切なICTの利用について多くの意見が交わされた。今回のようなアプリを利用することは、生徒の学習の一助となり、意欲的に創作活動に取り組むことのできる効果的な方策と言える。例えば今回使用した「GarageBand」は、使い方も比較的容易であり、楽しみながら活動を進めることができる。ただし、譜面として表示される機能はないため、紙面としての楽譜の提示が必要な場面もある。また、2人のつくった曲をつなげて歌唱する場面では、アプリではなくキーボードの周りにグループで集まって歌唱することで、学習の深まりが見られた。



ICTの利用には、機器を生徒の人数分揃えることなど、難しさもある。事前研究会の授業では、キーボードの補助的役割としてiPadのピアノアプリを用いたが、音量が小さく聴こえないという問題点もあった。そのため、中等教育研究会の授業時には小型のスピーカーを用意し、グループのメンバーにも音が聴こえるよう改善したが、やはりピアノやキーボード等と同時に使用するには困難な状況もあった。すべてをICT機器に頼るのではなく、適切な場面で教師がねらいをもって使用させることが求められる。

また、今年度はグループ活動についての研究を行った。今回の創作では個人で作品を完成させることが目的であった。しかし、個人で黙々と活動していても、学習は深まらない。よりよい作品づくりのためには多くの経験を積み、他者の意見を聞き、感性をより高めていくことが必要と考えた。

①グループ構成

事前研究会の授業では、男女別4～5人のグループで活動した。これより少人数で活動させると、実際に歌唱する場面で恥ずかしがり、声を出さないことがある。お互いの声を聴きながら、歌唱するには適切な人数であったと考える。また、同性にしたことで、合わせて歌いやすいという利点があった。しかし、4～5人に1台のキーボードでは活動に支障がでる場合もあった。補助的に利用したiPadも音が聴こえにくく、自分のつくった音楽を弾いて確認したいときに、すぐに使えないという問題も起きた。

中等教育研究会の授業では、男女混合8人のグループで活動した。ただし、8人全員で活動するのは授業の後半で行い、前半では2人でお互いの曲を聴きあうことから始めた。2人で1台のiPadを使用したこともあり、リズムや旋律をつくりながらお互いに学びあう姿が見られた。できた作品を同性4人のメンバーに発表し、さらに工夫した作品を8人で歌いあい、つなげてひとつの曲に仕上げるよう仕組んだ。はじめから8人全員の意見を聞いていると、たくさんの情報を得ることができる。しかし自分の作品に生かすべき意見を選んだり、情報を整理したりするには時間もかかる。段階的に人数を増やしていくことで、その場面に必要な意見を聞くことができ、効果的であったと考えられる。

②グループ活動にかかる時間

今年度の創作では、必ず個人でひとつの作品を完成させることになっている。そこで、まずは自分一人で考え、創作する時間を確保した。グループ活動の後にも、必ず自分で考え直す時間をとり、個人→グループの繰り返しとなるように設定した。グループによって、発表したり意見を言い合ったりする時間は違ったが、個人の時間が確保できるよう、折を見て教師が声をかけて先に進むよう促した。

③活動への支援

グループ活動を仕組むうえで、どのグループにも同じだけの支援をすることは困難である。時間的な制限もあるが、グループによって進度の違いがあり、必要とする支援の方策もさまざまだからである。ICTを利用した今年度の授業では、前半は機器の操作方法について教えることに多くの時間を必要とした。生徒がある程度使いこなせるようになって初めて、音楽的な活動への支援に回ることができた。グループを作るときには、音楽を得意とする生徒がどのグループにもいるよう工夫し、教師が回れないときには活動をリードできるようにした。指導が必要な情報は全体になげかけ、他のグループの途中経過を発表させるなどして、情報を共有できるように留意した。それでも、やはり授業時間内にそれぞれのグループに十分な支援をすることはできなかった。研究会でも、「適切な場面での教師の声かけが、活動を促進させる。もっと全体になげかける部分が多くてよい」という意見があった。今後は、全体への効果的な指導・声かけについてさらに工夫していきたい。



以上のことから、来年度は次の二点についてさらに研究を深めていきたいと考えている。まずは課題設定の工夫である。授業を作る際には、生徒がやりたいと思える課題設定にこだわってきた。全体研究の求める「深く考える授業」には、課題設定がさらに重要になってくると考える。これまで以上にこだわり、ねらいを明確にした課題の設定を行っていきたい。

もうひとつは、グループ活動への支援の方策についてである。今年度課題が残った点でもあるので、全体に効果的な支援ができるにはどのような方策が考えられるのか、さまざまな形態の授業で工夫し、実践していきたい。

来年度は創作だけでなく、歌唱や鑑賞の授業でも実践できるよう、努力していきたい。

〈引用・参考文献〉

- ・ 中学校学習指導要領解説 音楽編 文部科学省
- ・ 評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 音楽）
H23 国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- ・ 山梨大学教育人間科学部附属中学校研究紀要 H23~25
- ・ 「教えて考えさせる音楽の授業」 内田有一著 2014
- ・ これからの中学校音楽ここがポイント 山本文茂監修 2011